

# 子どもの自己有能感と自尊感情及び自己決定意識の関係 —コンピテンスの類型化からの分析—

Relations of children's competence to self-esteem  
and self-determination awareness

兄 井 彰

須 崎 康 臣

Akira ANII

Yasuo SUSAKI

保健体育ユニット

島根大学

(令和4年9月29日受付, 令和4年12月20日受理)

## Abstract

The purpose of this study was to examine the relations of children's competence to self-esteem and self-determination awareness. A cluster analysis was performed to classify the children using each child's competence score. Competence in each field was clustered and verified by comparing self-esteem and self-determination awareness for each cluster. The tendencies of each competence were divided into "Children who have confidence in studying but lack confidence in exercise", "Children who lack confidence in everything", "Children who have confidence in exercise", "Children who have confidence in everything", "Children who lack confidence in studying and exercise" and "Children who lack confidence in studying in particular". The results of this study confirmed that children with high self-efficacy in learning tend to have high self-esteem and self-determination awareness.

## 1. はじめに

現行の学習指導要領(文部科学省, 2017a: 2017b)では, 子どもの知識・技能, 思考力・判断力・表現力等, 学びに向かう力・人間等の3つの資質・能力を育成するために, 子どもが授業を通して主体的・対話的で深い学びを行うことを求めている。また, 観点別学習状況の評価の観点についても, 知識・技能, 思考力・判断力・表現, 主体的に学習に取り組む態度の3つが示されている(文部科学省, 2019)。子どもが主体的・対話的で深い学びにより主体的に学習に取り組む態度を身につけるためには, 学習に対して内発的に動機づけられなければならない。すなわち, 学習という行為自体が目的となって動機づけられ(鹿毛, 2013), 子どもが主体的に学習することが必須となる。この内発的動機づけは, 学んだり, 探索したり, 挑戦したりすることを通して, 自己の

能力を高めようとする傾向性により生じると考えられる。そのため, 自己の能力に対する認知である自己有能感を高めることで, 子どもが主体的に学習に取り組む態度を育むと考えられる。

また, 子どもが, 自分への肯定的な感情評価である自尊感情(榎本, 1998)を高めることで, 主体的に学習に取り組む態度も育まれると推察される。さらに, 子どもが主体的に学習に取り組むためには, 自ら学習に取り組んでいく意識が重要と考えられ, このように自分のことは自分で決めているという自己決定感を高めることも重要であろう。

子どもの主体的・対話的で深い学び及び主体的に学習に取り組む態度と関連する自尊感情と自己決定感は, 自己有能感に支えられていると考えられることができる。桜井(1993)は, 自信を示す有能感が自尊感情と自己決定に対して正の相関関係を

有することを報告している。また、杉原（2008, p138）は、「自己決定の幅を広めていくためには有能さを向上させることが不可欠であり、有能になればなるほど自己決定の幅が広がる」と指摘している。つまり、自己有能感を高めることにより、自尊感情と自己決定感が育まれると考えられる。

子ども自己有能感が自尊感情と自己決定感に関係していると考えられるが、この自己有能感は子どもの活動の様々な領域から構成されている。Shavelson et al. (1976) は、自己概念を学業的自己概念、社会的自己概念、情動的自己概念、身体的自己概念に分類する多面的階層を想定している。また、Harter (1982) は、有能さを学習・社会・運動といった3つの領域に区分している。つまり、自己有能感が多領域にわたり、それらの領域での有能感の高さが、自尊感情と自己決定意感と関係すると推察される。つまり、子どもの学習・社会・運動の各領域における有能感が高まることにより、自尊感情や自己決定感も高めると考えられる。

しかしながら、子どもが有する学習・社会・運動に対する有能感は、個人によってその高さは異なっていると想定される。例えば、学習・社会・運動に対する有能感が全て高い子どももいれば、いずれかの領域のみの有能感が高い子どもも存在するであろう。この点について、伊藤（2001）は、学習動機において、一人一人の子どものなかで組み合わせっており、いくつかのタイプ（型）が存在すると指摘している。つまり、子どもが有する学習・社会・運動に対する有能感の組み合わせによって、いくつかの型があり、それらの型によって自尊感情と自己決定感の高さが異なることが推察される。

以上のことから、本研究は、有能感をコンピテンスと位置づけ、学習コンピテンスと社会コンピテンス、運動コンピテンスを用いて、子どもの類型化を試み、類型化された群の自尊感情と自己決定意識の違いについて検討することを目的とする。

## 2. 方法

### 1) 調査対象者

調査対象者は、調査協力への同意が得られており、データに欠損がない福岡県下の小学生 483 名と中学生 440 名であった。内訳は、表 1 に示す。

表 1 調査者の内訳

性別	小学生			中学生			計
	4年生	5年生	6年生	1年生	2年生	3年生	
男子	24	90	48	77	139	105	483
女子	23	69	93	53	121	81	440
計	47	159	141	130	260	186	923

### 2) 手続き

調査の趣旨及び調査内容について、学校長に説明を行い、調査協力の得られた学校を対象とした。調査票は各クラスで配布され、その場で回収を行った。調査票には、調査内容が成績に影響することがないこと、個人を把握できないように処理することが明記された。調査は無記名形式で実施され、質問項目への回答をもって調査への協力を同意したものとした。

### 3) 調査内容

#### 1. コンピテンス

桜井（1992）が作成した児童用コンピテンス尺度を用いた。この尺度は Harter（1982）が作成した尺度と、この尺度の日本語版（桜井，1983）を参考に、児童が回答しやすいように改善した尺度である。この尺度は、学習コンピテンス、運動コンピテンス、社会コンピテンス、自己価値の4つの下位尺度から構成されている。項目数は各下位尺度 10 項目あり、計 40 項目となる尺度である。回答は、「はい」から「いいえ」の4件法で求めた。各下位尺度の合計得点を算出し、得点が高いほど各領域のコンピテンスが高いことを意味する。なお、本研究では自尊感情尺度を用いるため、自己価値得点は用いなかった。

#### 2. 自尊感情

桜井（2000）が邦訳した Rosenberg（1965）の自尊感情尺度を用いた。この尺度は、自分に対してこれでよい（good enough）と感じるような自分自身に対する肯定的感情の程度を測定するとされている。10 項目からなり、回答は「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」までの4件法で求めた。計 10 項目の合計点を自尊感情得点とし、得点が高いほど自尊感情が高いことを意味する。

#### 3. 自己決定意識

新井・佐藤（2000）が作成した自己決定意識尺度を用いた。この尺度は、自己決定に関する認知や感情、その願望や有能感に対して、それらをどの程度所有しているのかを測定できるものである。この尺度は、自己決定志向性、他者決定選考の少なさ、不安の少なさ、マイナス感情の少な

さ、自己決定効力感の5つの下位尺度の25項目から構成されている。なお、本研究では、尺度を構成する自己決定志向性を用いることとした。この下位尺度は、「私は、自分ことは自分で決めたいと思います」、「私は自分で決める時の方がやる気ができます」といった8項目で構成されており、自己決定に関する志向性を捉えるものである。回答は「あてはまる」から「あてはまらない」までの4件法で求めた。計8項目の合計点を自己決定意識得点とし、得点が高いほど自己決定の程度が高いことを意味する。

#### 4) 分析

学習コンピテンスと社会コンピテンス、運動コンピテンスから小学生と中学生を類型化するためにクラスター分析（Word法）のユークリッド平方距離を用いた。そして、類型化された群の特徴を検討するために、学習コンピテンスと社会コンピテンス、運動コンピテンスを従属変数、類型化された群を独立変数とした一要因分散分析を行った。このとき、各コンピテンスの得点はz得点に

換算をした。また、自尊感情と自己決定意識を従属変数、校種と類型化された群を独立変数とした二要因分散分析を行った。分析の有意水準は5%とした。分析には、SPSS (Ver.25) を使用した。

### 3. 結果

Word法を用いたクラスター分析を行った結果、デンドログラムを参考にして、図1のような6つのクラスターを採用した。各群の内訳は、表2に示した。

第1群は、「勉強には自信があるが、運動には自信がない子ども」と解釈した。第2群は、「全てに自信がない子ども」、第3群は、「運動には自信がある子ども」、第4群は、「全てに自信がある子ども」、第5群は、「勉強も運動も自信がない子ども」、第6群は、「特に、勉強に自信がない子ども」と解釈した。

今回の調査対象において、「運動には自信がある子ども」に分類される子どもが最も多く、全体の1/3程度を示している。この「運動には自信

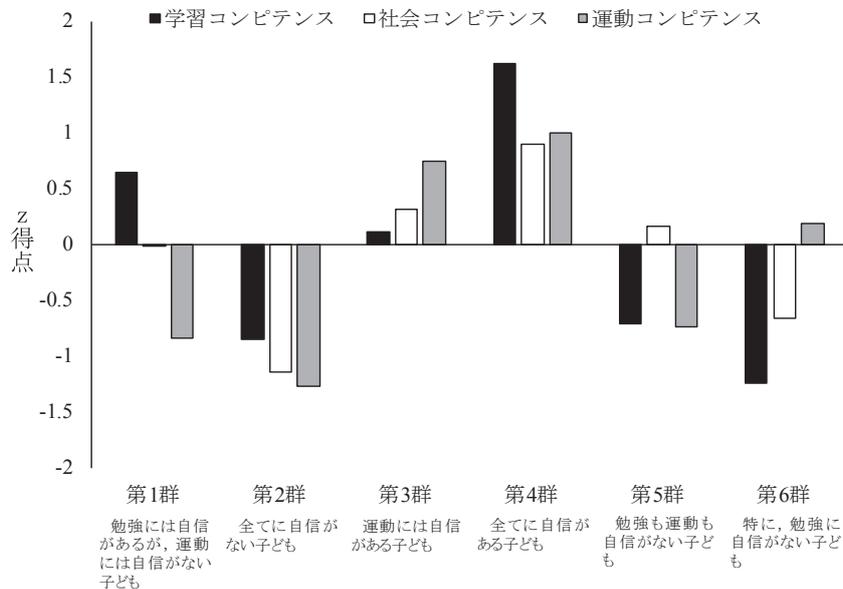


図1 各領域のコンピテンスによるクラスター分析における類型化

表2 各群の人数とパーセント

校種	(第1群) 勉強には自信があるが、運動には自信がない子ども		(第2群) 全てに自信がない子ども		(第3群) 運動には自信がある子ども		(第4群) 全てに自信がある子ども		(第5群) 勉強も運動も自信がない子ども		(第6群) 特に、勉強に自信がない子ども	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
小学生	69	20	30	9	132	38	59	17	34	10	23	7
中学生	91	16	96	17	199	34	43	7	69	12	78	13
計	160	17	126	14	331	36	102	11	103	11	101	11

表3 小学生における各群の自尊感情と自己決定意識

	(第1群) 勉強には自信があるが、運動には自信がない子ども		(第2群) 全てに自信がない子ども		(第3群) 運動には自信がある子ども		(第4群) 全てに自信がある子ども		(第5群) 勉強も運動も自信がない子ども		(第6群) 特に、勉強に自信がない子ども	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
自尊感情	23.26	4.39	20.17	3.44	25.37	3.53	29.00	4.34	22.65	2.72	21.09	5.42
自己決定意識	24.32	3.08	21.17	2.80	24.62	3.69	27.61	3.74	22.94	3.58	20.65	4.91

表4 中学生における各群の自尊感情と自己決定意識

	(第1群) 勉強には自信があるが、運動には自信がない子ども		(第2群) 全てに自信がない子ども		(第3群) 運動には自信がある子ども		(第4群) 全てに自信がある子ども		(第5群) 勉強も運動も自信がない子ども		(第6群) 特に、勉強に自信がない子ども	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
自尊感情	23.76	3.41	19.55	4.41	24.77	3.68	28.79	3.94	21.96	3.68	20.49	3.97
自己決定意識	25.36	4.05	22.64	4.34	25.66	4.01	28.21	2.77	24.64	3.44	23.47	3.70

がある子ども」は、運動コンピタンスが相対的に高いが、全ての領域で平均的な有能感を有している子どもだと考えられる。また、「全てに自信がある子ども」は、小学生で約17%であるのに対して、中学生では7%と、10%も少なくなっている。その反対に、「全てに自信がない子ども」は、小学生では、9%と少ないが、中学生になると17%と多く、学年が進むにつれて、全てに自信がある子どもが少なくなり、全てに自信がない子どもが多くなると考えることができる。

この類型化された群のコンピテンス特徴を検討するために、一要因分散分析を行った。その結果、学習コンピテンスでは、主効果が有意 ( $F(5, 917) = 405.83, p < .05$ ) であった。多重比較の結果、「全てに自信がある子ども」が最も高い値で、次いで「勉強には自信があるが、運動には自信がない子ども」が高かった。また、「運動には自信がある子ども」は「全てに自信がない子ども」、「勉強も運動も自信がない子ども」及び「特に、勉強に自信がない子ども」より高い値を示した。さらに、「特に、勉強に自信がない子ども」は、最も低く、「全てに自信がない子ども」及び「勉強も運動も自信がない子ども」よりも低かった。

社会コンピテンスでは、主効果が有意 ( $F(5, 917) = 99.90, p < .05$ ) で、多重比較の結果、「全てに自信がある子ども」が最も高い値で、次いで「勉強には自信があるが、運動には自信がない子ども」、「運動には自信がある子ども」、「全てに自信がある子ども」が高かった。また、「運動には自信がある子ども」は「勉強には自信があるが、運動には自信がない子ども」より高い値を示

表5 分散分析の結果

	校種 (1, 911)	群 (5, 911)	交互作用 (5, 911)	多重比較
自尊感情	1.48	71.49 *	0.52	4>3>1,2,5,6; 1>2,6; 5>2
自己決定意識	23.63 *	33.12 *	0.91	4>1,3,5,6>2; 1,3>6; 3>5

1:勉強には自信があるが、運動には自信がない子ども

2:全てに自信がない子ども

3:運動には自信がある子ども

4:全てに自信がある子ども

5:勉強も運動も自信がない子ども

6:特に、勉強に自信がない子ども

した。さらに、「特に、勉強に自信がない子ども」は「全てに自信がない子ども」より高かった。

運動コンピテンスでも、主効果が有意 ( $F(5, 917) = 456.00, p < .05$ ) で、多重比較の結果、「全てに自信がある子ども」が最も高い値で、次いで「運動には自信がある子ども」、「特に、勉強に自信がない子ども」の順に高かった。また、「勉強には自信があるが、運動には自信がない子ども」及び「勉強も運動も自信がない子ども」は「全てに自信がない子ども」より高い値であった。

次に、各校種における各群別の自尊感情及び自己決定について、表3と表4に示した。この自尊感情と自己決定意識において、類型化された群と校種での違いを検討するために、二要因分散分析を行った(表5)。その結果、自尊感情では、群の主効果 ( $F(5, 911) = 71.49, p < .05$ ) のみが有意で、交互作用 ( $F(5, 911) = .52, ns$ ) と校種の主効果 ( $F(5, 911) = 1.48, ns$ ) は有意ではなかった。群の主効果が有意であったため多重比較を行った結果、「全てに自信がある子ども」が最も高い値

で、次いで「運動には自信がある子ども」が高かった。また、「勉強には自信があるが、運動には自信がない子ども」は「全てに自信がない子ども」と「特に、勉強に自信がない子ども」より高く、「勉強も運動も自信がない子ども」は「全てに自信がない子ども」よりも高い値であった。

自己決定意識において、群の主効果 ( $F(5,911) = 33.12, p < .05$ ) と校種の主効果 ( $F(5,911) = 23.63, p < .05$ ) が有意であり、交互作用 ( $F(5,911) = .91, ns$ ) は有意ではなかった。群の主効果が有意であったため、多重比較を行ったところ、「全てに自信がある子ども」が最も有意に高い値を示し、「全てに自信がない子ども」が最も低い値を示した。また、「勉強には自信があるが、運動には自信がない子ども」及び「運動には自信がある子ども」は、「特に、勉強に自信がない子ども」より高く、「運動には自信がある子ども」は「勉強も運動も自信がない子ども」よりも高い値であった。さらに、中学生は小学生より得点が有意に高かった。

#### 4. 考察

本研究では、子どもの各領域におけるコンピテンスから類型化し、自尊感情と自己決定意識との関係について検討することが目的であった。クラスター分析の結果、6つの群に分類することができた。ここでは各群のコンピテンス得点と自己決定意識得点の相対的な特徴から、それぞれの各類型の命名を行った。ここからは、コンピテンス得点が低い群から順に考察をする。

まず、「全てに自信がない子ども」は、全てのコンピテンスと自己決定意識が最も低かった。また、自尊感情については、「特に、勉強に自信がない子ども」を除き、他の群よりも低かった。この群に類型される子どもは、各領域に対する自信が低く、自尊感情と自己決定への意識が欠如していると考えられる。そのため、この群を「全てに自信がない子ども」と命名した。

次に「特に、勉強に自信がない子ども」は、運動コンピテンスが比較的高いが、学習コンピテンスと社会コンピテンスが低い傾向がある。自尊感情は「全てに自信がない子ども」及び「勉強も運動も自信がない子ども」を除き、他の群より低い。また、自己決定意識は「全てに自信がない子ども」を除き、他の群よりも低かった。つまり、この群は、運動に対する自信はある程度持っているが、他領域での自信や自尊感情が低く、自己決定に対する意識を欠如している子どもと考えられ

る。そのため、この群を「特に勉強に自信がない子ども」と命名した。

「勉強も運動も自信がない子ども」は、社会コンピテンスは平均的な自信であるが、学習コンピテンスと運動コンピテンスが相対的に低い。また、自尊感情は「運動には自信がある子ども」及び「全てに自信がある子ども」より低い、「全てに自信がない子ども」よりも高かった。さらに、自己決定意識は、「全てに自信がない子ども」より高く、「特に、勉強に自信がない子ども」を除くほかの群よりも低い。このように、この群は、対人関係に関する自信以外は低く、自尊感情もあまり高くないことから、勉強や運動の自信がなく、自己決定への意識も低いと考えられる。このことから、この群を「勉強も運動も自信がない子ども」と命名した。

「勉強には自信があるが、運動には自信がない子ども」は、学習コンピテンスが高いが、社会コンピテンスと運動コンピテンスが相対的に低い。また、自尊感情と自己決定意識は、「全てに自信がない子ども」と「特に、勉強に自信がない子ども」より高い。この群は、運動と社会に対する自信が低いが、勉強に対して自信を持っており、それに伴い自尊感情が形成され、自己決定への意識も高いと考えられる。したがって、この群を、「勉強に対する自信はあるが運動の自信がない子ども」と命名した。

「運動には自信がある子ども」は、運動コンピテンスが比較的高いが、学習と社会コンピテンス、自尊感情及び自己決定意識が平均的である。この群は、最も多くの子どもが分類されており、運動への自信をある程度持っているが、その他は平均的な子どもだと考えられる。この群を、「運動は自信がある子ども」と命名した。

「全てに自信がある子ども」は、すべてのコンピテンス、自尊感情と自己決定意識が最も高い。この群は、各領域に対する自信が高いため、自尊感情が形成されており、そのことが自己決定への意識が高いことにつながっていると考えられる。このことから、この群に分類される子どもを、「全てに自信がある子ども」と命名した。

特に、「全てに自信がある子ども群」は、各領域のコンピテンスが高く、それに伴い自尊感情と自己決定意識が最も高かった。このことから、この群に分類された子どもは、学校生活の多くの活動において自信を持っており、そのため自尊感情も高く、自分のことは自分で決めているという意識も高いことから、健全な状態にあると推察でき

る。それに対して、「全てに自信がない子ども」は、各領域のコンピテンスが低く、自尊感情と自己決定意識が最も低い。このことから、この群に分類された子どもは、全ての面で自信がなく、自尊感情も自己決定意識も低いことから、健全な状態にない可能性がある」と推察される。

このように、子どもによって各領域に対する有能感や自尊感情に違いが見られ、そのことが実際の行動に反映されるのではと考えられる。桜井(1983)は、児童においてコンピテンスと自尊感情との間の正の相関関係があることを示している。さらに、桜井(1993)は、学生における自尊感情と自己決定意識は有能感と正の関係にあることを明らかにしている。加えて、杉原(2008)は、有能感を有していることが、自己決定の幅を広げることが指摘している。これらのように、各領域に対するコンピテンスを有することは、自尊感情の形成に寄与するだけではなく、各領域で活動できる範囲が広がることによって、自己決定をする機会が多くなるため自己決定感が高まることが考えられる。このことから、学校生活で積極的に活動できる子どもとそうでない子どもが存在すると考えられる。

さらに、「運動は自信がある子ども」及び「勉強は自信があるが、運動の自信がない子ども」は、自尊感情と自己決定意識がある程度高く、比較的平均的な状態にある子どもと推察できる。一方で、「勉強も運動も自信がない子ども」及び「特に、勉強に自信がない子ども」は、自尊感情と自己決定意識が高いとは言えず、各領域の自信のなさが反映され、「全てに自信がない子ども」ほどではないが、健全な状態ではない可能性が考えられる。

以上のように、子どもの各領域におけるコンピテンスから類型化し、6つの群に分類することができた。この6つの群における自尊感情と自己決定意識を検討することにより、各領域の自己有能感の形成が、自尊感情や自己決定意識に影響していることが確認できたと考えられる。

本研究の限界点としては横断研究であり、その明確な因果関係を示すものではない。今後は、この類型化に準拠して、小学生と中学生に対して縦断的に調査し、その類型の変化とその類型による自尊感情と自己決定意識の変化について検討することで、より詳細に自己有能感と自尊感情及び自己決定意識の関係が明らかにできると推察される。

## 文献

- 新井邦二郎・佐藤 純(2000) 児童・生徒の自己決定意識尺度の作成. 筑波大学心理学研究, 22, 151-160.
- 榎本博明(1998) 「自己」の心理学—自分探しの誘い—. サイエンス社.
- Harter, S. (1982) The perceived competence scale for children. *Child Development*, 53, 87-97.
- 伊藤豊彦(2001) 小学生における体育の学習動機に関する研究: 学習方略との関連および類型化の試み. *体育学研究*, 46 (4), 365-379.
- 鹿毛雅治. (2013) 学習意欲の理論: 動機づけの教育心理学. 金子書房.
- 文部科学省(2017a) 小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説 総則編. [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_001.pdf)
- 文部科学省(2017b) 中学校学習指導要領(平成29年告示) 解説 総則編. [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_001.pdf)
- 文部科学省(2019) 「小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について(通知)」 [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/1415169.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1415169.htm)
- Rosenberg, M. (1965) *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.
- 桜井茂男(1983) 認知されたコンピテンス測定尺度(日本語版)の作成. *教育心理学研究*, 31, 245-249.
- 桜井茂男(1992) 小学校高学年生における自己意識の検討. *実験社会心理学研究*, 32, 85-94.
- 桜井茂男(1993) 自己決定とコンピテンスに関する大学生用尺度の試み. *奈良教育大学教育研究所紀要*, 29, 203-208.
- 桜井茂男(2000) ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. *筑波大学発達臨床心理学研究*, 12, 65-71.
- Shavelson, R. J., Hubner, J. J., & Stanton, G. C. (1976) Self-Concept: Validation of Construct Interpretations. *Review of Educational Research*, 46 (3), 407-441.
- 杉原 隆(2008) 新版運動指導の心理学: 運動学習とモチベーションからの接近. 大修館書店.